



国際化…… 少しずつ着実に

京都府立宮津高等学校外国語指導助手
Jarrad Morgan
ジャレット・モーガン

他府県のJETに出会うと、必ず「どこに配置されているのですか」と聞かれます。私が「京都府」と答えると、「なんと運がいいのだ」と決まってしまうそうです。そして彼らは私が京都市から電車で5時間のところに勤務していると知ることになるのです。彼らは少し考えて、もし京都市へのアクセスの良さが「幸運」の定義であるのなら、近隣の府県のJETのほとんどが私よりもはるかに幸運であることに気が付きます。

しかし、私は不満があるわけではありません。非常に幸運だと思っています。私は小さく緊密な日本のコミュニティに住んでいます。好意的な隣人とおしゃべりな子どもたちがいます。私の町は朝小さな雲がゆるやかに間を歩いて行く山に囲まれています。日本の名滝100選の一つが近所にあります。極めつけに、日本三景の一つである天橋立からほんの少しだけしか離れていないのです。



家の近くにある滝（名前不明）

こんなところに住めるのに、誰がどんよりして混雑した人間味のない都会に住みたいでしょうか。

しかし、日本の田舎に住むことは時に困難です。することがあまりないのです。京都市に行くには数時間、そして数千円かかります。とても質素な日本料理以外のものを食べるのにも電車で45分乗る必要があります。そして60歳以下の日本人と交流する機会のごくまれです。

日本に到着したとき、私の使える日本語では、どこにトイレがあるのか聞くことしかできませんでした。また、田舎に住んでいては日本語のレッスンも受けられないのです。さらに、私の学校の英語科教員（JTE：Japanese Teacher of English）の誰も同じ市に住んでいませんでした。楽しい行事や社会活動や後に趣味となる可能性があるものについて知ることはほとんど不可能でした。



家から徒歩15分で見られる天橋立の風景

幸い趣味として英語を勉強している地元の人が少いでした。6カ月後、私はその1人と出会いました。思いがけなく日本語について質問に答えてくれる人ができたのです。そして、彼女は大人になってからずっとこの町に住んでいたため、素晴らしい年中行事や隠れ家的な場所、私の大好きな町のその他の詳細について教えてくれました。

彼女が案内してくれた中で最も有益だったものの一つは空手道場です。白帯から緑帯までの4～6人ほどの門下生がいつも参加していて、私は様々なレベルの人から一対一の指導を受けることができ、同時に生徒の部活動の中で見られるような友情を味わうこともできています。

初めは展開が少し急でした。たった1年間日本語を勉強しただけだったのに、突然専門的な語彙に出会いました。幸い、先輩の1人が少し英語を話すことができ、最初の数カ月の間私を導いてくれました。道場では子どもはすぐに新しい言葉を覚えました。さらに、先生は「キドニーパンチ」のようなキープレズを覚えてくれました。毎週、彼は空手の攻撃方法を私に伝えるために、新しいやり方を身に付けているようでした。その一方で、道場の子どもと他の大人たちは日本とアメリカの文化の違いについて私に質問をしました。

極真空

極真会空手の漢字

しかし、私の空手の経験から利益を得たのは道場のメンバーだけではありません。思っていたとおり、道場のメンバーといつも会話をした結果として、日本語を話す上での私の知識は深まり、気軽に日本語をしゃべることができるようになりました。その上、空手を通して自分自身についても多くを学びました。

まず、自分の精神的、肉体的限界を絶えず広げていっています。初めは頭部や腹部への蹴りを受けるとよろめいていました。気がつくと組み手から逃げ、息を整え、頭を整理しようとしていました。しかし、2年後には一時的に錯乱したり息ができなくても集中して組み手を続けられるように

なりました。もし立てるのなら組み手を続けられます。

同様に、自分がどこまでできるのかという自分の中での限界の見極め方がわかりました。空手を始める前は、自分がどれだけ素速くまたは長く物事をできるのか知っているつもりでした。精神的にも肉体的にも自分に何ができるのか知っているつもりだったのです。ですから私はめったに自分の限界を試しはしませんでした。そして、自分が想定していた限界に近づくと手を緩め、止めていました。

さらに、日本での社会的圧力を感じる事ができたという予期しない利益を得ることができました。訓練をしている間、私は絶えず門下生たちが努力をしているのを目にしました。彼らは疲労の限界で均衡を保ちながら、一生懸命そして素早く組み手をします。彼らを見て私も頑張り、いくら止めたくとも続けられるように、絶えず緊張感を持っています。その結果、私は以前にできると思っていたよりもはるかに多くのことができるということがわかってきました。

空手を始めて、友人を通して日本の文化や日本語について多くのことを学びました。彼らもアメリカの文化や英語について学びました。さらに、自己修養、動機、不屈の精神について多くを学びました。本当に私は日本に来て向上したと思えずし、帰国する時が来たときには、私の周りの人たちがしてくれたように、私が彼らの生活に良い影響を与えていたいと願っています。そのときまで、私は少しずつ着実に国際化していきたいと思っています。



Jarrad Morgan

アメリカ・ワシントン州ワラワラの出身。1998年グレンネル大学化学部を卒業後、シアトル弁護士大学に行き2002年に卒業。弁護士試験合格後、ジェットプログラムに受かるまで、5年間弁護士として働く。アメリカに帰国後、弁護士を続ける予定。趣味は極真空手。



壁を乗り越えて

鹿児島県垂水市教育委員会外国語指導助手
Perry Pollard
ペリー・ポラード

鹿児島県にある垂水市という小さな町で、ALTとしてかれこれ2年間働いています。人口の多い私の地元（シカゴ市）から、こんな小さな町に住み慣れるまでは結構大変でした。私は初めて来日した時、日本語が全然出来なかったことと、一緒に仕事している先生たちが私より年上で垂水に住んでいないので遊ぶことも出来なかったことが住み慣れないの大きな二つ理由だったのでしょうか。初めて垂水に来た時に「1年間しか耐えられないんだろうな」と思っていたのですが、今JET参加者として3年目に入り、この2年間にわたって、とても楽しむことができましたし、日本の文化や言葉を勉強することにも努力しました。

良い思い出が沢山ありすぎて、もっとも良いのを選ぶのは難しいですが、中高生のための英語キャンプへの参加は恐らくその中には入るのではないのでしょうか？ 民間の外国語学校が毎年このキ

ャンプを行っているもので、県内の中高生たちと交流する良い機会なのです。

今までこのキャンプに2回参加したことがあり、これからも参加していきたいと思います。

県内のあちこちのALTたちがこのキャンプに参加するよう依頼されています。初日に生徒たちは4、5人くらいのグループに分かれ、グループのリーダーとして1、2人のALTも入ります。各グループはある国を選び、そして、その国のさまざまな側面について研究します。今までの参加の中で、私が担当していたグループたちは、歴史・スポーツ・映画・音楽・食べ物などさまざまなテーマについて勉強していました。生徒たちは日本語で研究しますが、後でALTの指導によって、辞書を使いながらその情報と結果を英語に訳します。

キャンプの担当者に、キャンプの間にALTた



英語キャンプ 2009年8月 発表後で



英語キャンプ 2009年8月 発表準備の時

ちが出来るだけ日本語を使わないよう言われます。参加者は、中1～高3までの中高生で、当然彼らの英語力にも大きな差があります。

休憩を入れて、各グループは毎日午前9時から午後5時まで勉強します。プレゼンテーションの翻訳が終わってから、生徒たちはポスターを作ったり、スピーチの練習をしたりします。このスピーチの練習は私にとって、この英語キャンプの中で最もやりがいがあることだと思います。アメリカでは、私は臨時教師として働いた経験があり、その学校のスピーチコンテストのコーチの経験もありますので、人の前で話す技術を教えるのもある程度慣れてしています。今自分が働いている垂水市でも、たまにこういう機会はありますが、あまりにも小さな町なので、英語に興味を持っている生徒は多くありません。なので、このキャンプを通して、今までの自分のキャリアの中で、結構大切だった面を取り戻すことも出来る気がします。

夕食の後に、いろいろなゲームや自由にコミュニケーションを取ることにいった、夜のアクティビティもあります。言葉の壁を壊すのが確かに大変ですが、それでも非常にやりがいのある経験だと思います。夏休みの大事な1週間で潰すことと、彼らの英語への熱心さにいつも驚いています。生徒の中では英語で話すことに抵抗する生徒もいますが、たった1週間の中で、多くの生徒は外国人と一緒にいること、コミュニケーションを取ることに心を開きます。彼らの勉強と関係のないことや、われわれの国について質問をする生徒もいます。「もし留学したら、どうしたら英語力を上達させるの？」というような質問も受けたことがあります。

こういう国際交流プログラムをもっと増やせたら、よいと思います。特に日本の他の地域と違って、外国人の存在が薄い鹿児島県でもさらに増やしてほしいです。ALTがこうしたキャンプに参加できるようにするだけでなく、参加を促すように契約団体に求めるべきだと思います。このキャンプのおかげで、ALTと生徒たちの関係を深まることも出来ます。このキャンプに初めて参加した時に、実は私の生徒が一人いました。普段彼は



英語キャンプ 2010年3月 発表準備の時

とても口数が少なく控えめだったので、あまりクラスでは自ら話すことが出来ませんでした。このキャンプのおかげで私たちがも仲良くなり、その結果彼は今英語で話すことにも自信を持つことが出来ました。

これはこのようなキャンプのもっとも大事な一面だと思います。普通の英語のクラスの時、あまり抵抗を感じない、もしくはそのクラスに自分なりに参加することが出来ない生徒はいますが、しかし、彼らはこういう国際交流プログラムでは、英語をもっと上手になりたいという、同じ目的を持っている友達に囲まれています。

どんな仕事でも、不満を感じることは当然ですが、その不満を感じる時にこのキャンプをよく思い出しています。明らかではないかも知れませんが、ALTは少なくとも生徒たちの人生の中で影響を及ぼしているのではないかと思います。



アメリカのシカゴ出身、27歳。2年前から、鹿児島県の垂水市のALTとして、中学校と小学校で英語を教えている。大学の専門は文学で、日本が大好き。仕事はとても楽しい。趣味は、映画を見ること、日本語の勉強や本を読むこと。これからよろしくお願いします。

Perry Pollard

Internationalisation... One Kick At A Time

When I encounter JETs from other prefectures, the inevitable question arises: "Where are you based?" When I answer, "Kyoto Prefecture," I invariably hear how lucky I am. Then, they find out that I am five hours from the city by train. Quickly doing the math, they discover that, if access to Kyoto City is the definition of "luck," then most JETs in neighbouring prefectures are far luckier than I.

However, I am not complaining. I consider myself incredibly lucky. I live in a small, tight-knit Japanese community. I have friendly neighbours and chatty neighborhood kids. My town is surrounded by mountains through which wisps of cloud gently glide in the mornings. I even have one of Japan's 100 most beautiful waterfalls in my backyard. Finally, I am just a short stroll from one of Japan's three most beautiful scenic views: Amanohashidate. Who wants to live in a grey, crowded, impersonal metropolis when they can live here?

However, living in *inaka* Japan can be difficult at times. There is simply not a lot to do. Kyoto City is several hours and thousands of yen away. Eating anything other than very basic Japanese cuisine requires a 45 minute train ride. And opportunities to socialise with anyone Japanese under the age of 60 are few and far between.

When I arrived in Japan, my Japanese was limited to asking

where the nearest toilet was. Also, living in the *inaka* meant that there were no classes available for learning Japanese. Furthermore, none of my Japanese Teachers of English (JTEs) lived in my city. As such, finding out about fun events, social activities, or potential hobbies was nigh impossible.

Fortunately, there are a handful of locals who study English as a hobby. After six months, I was fortunate enough to meet one of them. Suddenly, I had someone who could answer my questions about Japanese. And because she had lived in the city her entire adult life, she was able to tell me about all the great annual events, hidden gems, and other ins and outs of my beloved city.

One of the most rewarding places she helped me find was a karate dojo. With regular participation of about four to six students ranging in belts from white to green, I have been able to receive a lot of one-on-one instruction from people of various skill levels while also getting a taste of the camaraderie regularly displayed in my students' club activities.

Initially, the going was a little rough. With only a year of Japanese, I was suddenly faced with a specialised vocabulary. Fortunately, one of my *senpai* had a smattering of English that allowed him to guide me during my first few months. Additionally, the children in the class quickly learned new

Crossing Barriers

For the past two years, I have worked as an ALT in Tarumizu City, located in Kagoshima Prefecture. I'm originally from a very populous suburb of Chicago, so transitioning from a big city to a small town was a big change for me. I couldn't speak any Japanese when I first arrived, making the transition even more difficult and most of the teachers I work with are older than me or don't live in my town, making socialising tough. At first, I believed I could only live in Tarumizu for one year. But now, I'm entering my third year on the JET Programme and I've enjoyed my time here immensely, dedicating myself both to learning more about Japan and studying the language.

It's difficult to recount some of my best experiences here as there have been many of them. But one of my best experiences here has been my participation in a local English camp for junior high and high school students. The camp is operated by a private English school so it gives me a chance to interact with students from all over the prefecture. I've now participated in this camp twice and hope to participate again in the future.

Several ALTs from Kagoshima are asked to participate in the camp. On the first day of the camp, the students are broken up into groups of five with one or possibly two ALTs selected

for group leaders. Each group under the guidance of the ALT selects a country to research. The students then decide what aspects of that country they would like to learn more about. In the two camps I've attended, my groups have studied a wide range of topics, such as history, sports, movies, music, and food. Although the students do most of their research in Japanese, they later work on translating the reports into English, relying largely on guidance from the ALTs and dictionaries.

The ALTs were all asked to refrain from speaking Japanese during the camp. As the students span from first year junior high age to final year of high school, they also have a wide range of their ability. Some are able to speak very little to no English while others have a very solid grasp on the language.

The students work from around nine in the morning until five in the afternoon with breaks for snacks and lunch. Once the students finished translating their presentation, they began work on posters and practiced speaking. For me, this was the most rewarding aspect of the camp. In America, I worked as a substitute high school teacher and also served as the coach for the school's mock trial team. So I've grown accustomed to teaching students public speaking techniques. Although

Jarrad Morgan

words. Furthermore, our *sensei* picked up some key phrases like “*kidonii punchi!*” Every week, he seems to master a new way of telling me how to injure someone. Meanwhile, both the children and the other adults in my dojo have new questions about differences between Japanese and American culture.

However, the members of my dojo are not the only ones who have benefited from my karate experience. As would be expected, my knowledge of and comfort with speaking Japanese has increased significantly as a result of regularly conversing with the members of my dojo. Additionally, I have learned a lot about myself through karate.

First, I am constantly expanding my mental and physical limitations. Initially, a kick to the head or stomach would leave me staggered. I would find myself backing away from a fight, trying to catch my breath or clear my head. After two years, however, I have learned to focus and continue fighting despite temporary disorientation or the inability to breathe. If I am still standing, I can still fight.

Similarly, I have learned how I place artificial limitations on what I can accomplish. Before joining karate, I believed that I knew how fast or long I could do something. I believed that I knew what I was capable of both mentally and physically, so I rarely—if ever—tested those limits. As a result, when I

approached my preconceived limit, I would slow down or give up.

Additionally, I have discovered an unexpected benefit of the social pressure one can feel in Japan. While training, I constantly see my fellow members pushing themselves; they continue to fight hard and fast despite balancing on the edge of exhaustion. Watching them, I feel a constant pressure to keep pushing myself, to prove that I too can continue doing something no matter how much I want to stop. Hence, I have found and am continuing to find that I am capable of far more than I previously thought possible.

As a result of karate, I have learned much about Japanese culture and language through the friends I have made. Additionally, they have learned much about American culture and the English language. Furthermore, I have learned a great deal about self-discipline, motivation, and fortitude. In essence, Japan has made me a better person, and I hope that, when the time comes for me to eventually return home, I will have made as positive an impact on the lives of those around me as they have on mine. Until then, I will continue to internationalise one kick at a time.

英語

Perry Pollard

I have gotten the opportunity to help a few students in my schools with an English club, the number of interested students is unfortunately not very high in a small town. So I've found these English camps to be a great way to re-embrace the kind of coaching that was such a big part of my professional life in America.

After dinner, there would be an evening activity, such as playing games or just talking with each other. Crossing language barriers with these students was certainly a difficult, but rewarding experience. I was always struck by their commitment and enthusiasm to learn English, so much that they'd sacrifice a week of their vacation time in order to attend this camp. At first, some of them were shy and not willing to speak much English. But over the course of the week, the students would open up to the ALTs and grew comfortable in speaking with us. Some students would even ask us for advice on matters unrelated to the school or ask us about our home countries. I had students ask me for tips on how to improve their English or if they should consider studying abroad.

I find these kinds of internationalisation programs are good and I would definitely like to see more of them implemented.

Especially in prefectures like Kagoshima, where there isn't as much of an international presence as there is in more populous areas of Japan. I believe contracting organisations should be asked to not only allow their ALTs to participate, but to also encourage them to do so. It fosters better relations between students and ALTs. In fact, during my first camp, one of the students assigned to my group was a student at a school I work at. In class, he's very quiet and reserved, almost never speaking. But during this camp, I was able to get to know more about him as a person and he became more comfortable speaking English as a result.

This I feel is a very important aspect of camps like this. Sometimes, students may not feel challenged enough in their English classes. Or perhaps they're intimidated or too shy to participate in class as much as they'd like. But in camps like this, they're surrounded by like-minded students, all of whom are looking to improve their language skills.

Frustration is normal in any job. And whenever I feel that frustration, I'm able to recall my memories from these camps. It's a comforting reminder that, although it may not be obvious, we ALTs do make a difference in our students' lives.

英語